

第3回 あおもり立志挑戦塾

平成22年7月24日（土）～25日（日）

今年度第3回目の「あおもり立志挑戦塾」は、7月24日～25日、青森市浅虫温泉「帰帆荘」で開催しました。講師の、あん・まくどなるど氏（国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長）は、自らの人生にチャンスとチャレンジをくれた日本、閉鎖的ではない万華鏡のような日本の多様な魅力について、日本の8割を訪れた経験を踏まえ、お話ししてくださいました。

私は、1982年、高校1年生の時に、交換留学生として、初めて日本に来ました。私は、カナダで生まれ育ち、子どもの頃は父親の仕事の関係で、スウェーデンで暮らしていたんです。旅好きの両親の影響を受け、世界を歩いてみたいという気持ちが湧いてきたんですね。生意気な16歳は、両親と約束して、日本に来ました。最初はあまり上手いかなかったんですね。何故なら、プライド高かったから。このままでは非常に隔離された1年間になると思い、開き直って、間違ったりした時には、内側が辛くても笑うことが大事だなと思ったその日から、日本人との対話が少しずつ成り立つようになっていくんです。



私は異文化を求めて日本に来たんですけど、よく考えてみると、日本に来たおかげで自分の成長が広がったような気がするんですね。日本に来て、いろんなプラスが一杯あったと思うんですが、なぜ日本が長くなったかという、やっぱり日本はチャレンジとチャンス一杯与えてくれましたから。今でもそうです。

高校時代は日本で1年間暮らして、カナダに帰りました。でも、もう少し日本のことを勉強したいと思って、大学3年生の時に熊本大学に来ました。熊本大学では、先輩に相談し、熊本でしか体験できないものやってみることにしました。当時の熊本は、国内のい草の8割近くを生産していたこともあり、い草植えを体験するため、い草農家を紹介してもらいます。い草植えは、一旦植えたものを掘り返し、まっすぐに長く入っていけるように根分けして、それをもう一度植える。しかも後ろを向きながら植えていくんです。大変でした。でも、熊本で、一番関心を持つようになっていくのは、社会変化はどういう速度がいいのかということ。その問い掛けをしながら、農村社会が主流であった日本のコミュニティに行って、農村の視点から20世紀を見てみようと思いました。

次は長野県に行きます。なぜなら、大学にいれば、ちょこちょこフィールドに行ったりはできるでしょうけど、やっぱり住まなければいけないと思ったんです。どっぷり農村に浸かって、進もうと思ったんです。そこでまず私は、フリーライターとして、北から南までいろいろ歩き始めます。しかし、農村・漁村のフリーライターで給料を得るということは大変。原稿料は400字で500円かどうかというような世界。生活はやっぱり、何とかなるようになっていくんですけど。しかし、このままではひょっとしたらエネルギーがもたないかなと、正直思ったりもしました。その時に、ある意味、私の人生を救ってくれたのが、野田一夫との出会いだったんです。その縁で、1997年に宮城大学に勤めることとなります。宮城大学では、留学生に日本のことを教えるほかに、環境省で仕事するというチャ

ンスをもらいました。1999年に、客員研究員として環境省で仕事をするようになりました。

温暖化問題について全く知識の無い私が、環境庁で気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第三次評価報告書のときの政府の一員になったんです。環境庁に頼まれたのは、IPCCに提出する英語の論文の訂正やブリーフィング、あるいは、日本語のものを英語に翻訳すること。非常に恵まれた仕事でした。2007年まで第3次、第4次評価報告書の環境省の政府レビューチームの一人としてだけでなく、日本代表団の一人として、IPCCの会議にも出ました。この年齢では、カナダの代表にはなれないですよ。だから、そういう意味では、異文化に行って、ちょっと違う道を歩もうとすると、生まれ育った所よりも、もっと大きなチャンスが時にはあります。私にとって、それは日本です。

その国連の会議の帰りに飛行機の中で会った国連大学の人から、ある日突然電話がかかってきて、国連大学が金沢市に作る小さな研究所の初代所長というチャンスをもらいました。これは2008年の4月からスタートしました。私に与えられた課題は、北陸にいる研究者・政策関係者の人達と共同で里山、里海に関するいろんな研究や生物多様性、気候変動の問題について研究活動すること。ですから、今、里海をはじめ、沿岸海域の研究している人達や現場の人達と一緒にやっています。

最後に、最近見ていて感動している人たちについて話したいと思います。

羽咋市の高野さんは、^{はくかい}神子原^{みこはら}という集落の神子原米を海外に売っている。パチカンに手紙を出して営業に行き、イタリアのデパートでも売るといって、攻める農業。また今、彼らはIターン希望者のため、農地・空き地バンクを作っているけど、集落の人達が、田舎で暮らしているかどうか、希望者に面接試験と実地試験をしています。その中で受け入れていこうとしているのは、手に職を持つ若者。アーティストとか職人、プラス農業。だから、休耕田問題の解決と同時に、空き家に住んでくれることによって、家が生きてくるんです。それが凄く素晴らしい。



三重県の速水林業は、日本で初めてFSC（Forest Stewardship Council）という、持続型林業の国際認証を受けたんです。彼の森は美しい。日本の国土の7割ぐらいは森林ですから、本当に日本の林業を今後どうすればいいのかということでは、やっぱり経営の中で自然に対しどのようにサステナブルな森林を作ればいいのかは、地方では大きな課題です。

農業では、岩手県遠野の多田克彦さん。彼は大学を出て会社で働いた後、実家に帰ったんですけど。やるんだったらば、究極の所を探る、実現する。そして誰もやらないことを2番でなくて1番でやろうとするタイプです。彼は、東北に対して一杯、厳しいことも言います。厳しいことも言ってくれるけども、しかし夢も希望も与え、勇気づけてくれます。

宮城県大崎市は今、「冬水田んぼ」で知名度が上がっています。国連のラムサール条約でもの凄く高く評価されている所です。湿原の周りの田んぼを、冬場の渡り鳥の餌場にするため、水を入れるんですね。鳥の餌場では安全な餌の供給もしなければいけないので、彼らは有機栽培など、環境に配慮した農法に取り組むようになっていくんです。コミュニティを変えていく動きで、韓国との絆を作ったり、国連の条約を変えていく活動までなっています。やっぱり日本はいろんな面白いことをやっているんです。

地方を回れば回るほど、感動の出会い、感動の出来事、感動の活動が一杯あります。そして、そのもっている輝きをもうちょっと大事にしなければいけないんじゃないかなと日々感じています。